

33. 胃粘膜に対する高圧酸素療法の影響

小関秀旭¹⁾ 笠貫順二¹⁾ 今泉照恵¹⁾
 吉田 尚¹⁾ 斉藤春雄²⁾ 太田幸吉²⁾
 (¹⁾千葉大学医学部第2内科)
 (²⁾斉藤労災病院)

目的：我々は消化性潰瘍に対する高圧酸素療法（以下OHP）の効果について検討しており、前回の本学会総会において、インドメサシン潰瘍発生をOHPが有意に抑制すること、インドメサシンの胃粘膜血流低下作用が、OHPにより抑制されることを報告した。今回は攻撃因子——胃液pH、ペプシン活性——の面より検討したので報告する。

方法：24時間絶食した体重350～400gの雄性Sprague-Dauleyラットを用い、ラットをOHP施行群、未施行群に分け、それぞれ、胃液pH、ペプシン活性を測定した。

1)胃液pH測定：Ghosh, Shildの方法に準じ、1/4000 N. NaOHを1ml/min.の割合で胃内灌流を行い、灌流液を微小pHガラス電極に通すことにより、経時的に胃液pHを測定した。

2)ペプシン活性：幽門部を結紮後、前胃に瘻孔をつくり、同部より30分毎に2時間後まで胃液を採取し、日本消化器病学会胃液測定法検討委員会試案に従い、Anson変法により測定した。

OHPの条件は、1.7 ATA, 90分、酸素はラットの頭部を被ったビニール袋内に4l/min.の割合で流した。

結果：1)胃液pH測定：OHP施行群、未施行群とも、pH6～7の間をわずかに変動したが、差はみられなかった。

2)ペプシン活性：OHP施行群は未施行群に比し、低下傾向がみられたが、有意差はなかった。

以上より、OHPにより胃液中のペプシン活性が低下する可能性が示唆されるが、これに関しては更に検討を重ねる所存である。また、攻撃因子の増強が原因であると考えられる実験潰瘍モデルを使用して同様の検討を行い、併せ報告する。

34. 高気圧酸素療法が奏効したと思われる網膜動脈閉塞症の1例

大藪由布子¹⁾ 林 文彦¹⁾ 八木博司²⁾
 (¹⁾福岡市林眼科病院)
 (²⁾福岡市八木病院)

網膜動脈の急激な血流途絶により網膜に虚血状態を惹起する網膜動脈閉塞症は眼科疾患の内では、緊急の処置を必要とするものである。しかし発病後、緊急の治療を行っていても、初期の虚血による網膜の機能脱落のために、予後は余り良くないことが多い。今回私たちは、56才の男性の発症後約15時間を経た網膜動脈閉塞症に対し、眼球マッサージ、ダイアモックス静注、星状神経節ブロック及び高気圧酸素療法を行い良好な結果を得たので報告する。高気圧酸素治療は2 ATA O₂で15回、3 ATA O₂で13回、いずれも時間は90分間で23日間に計28回施行された。その間、星状神経節ブロックは計20回併用された。視力は初診時、手動弁であったものが最終的には0.7となり、中心暗点もかなりの縮小を示した。